天　　気　　1983年1月
Vol. 30, No. 1

巻　頭　言

気象学会100周年記念事業を終えて

理事長　岸保勘三郎

昨年7月に第22期の理事改選があり，新しい理事会が発足しました．会員の皆様のご協力により，今後2年間の任期を全うしたいと思います．

第21期の理事会の主な仕事は気象学会100周年記念事業を行うことであり，事業の一部は第22期の新理事会にひきつがれました．記念事業として，100周年の記念式典を行うこと，「気象集誌」特別号(Vol.60, No.1, 1982)の発行，レビュー，座談会，通史，総目録からなる「天気」特別号（1982年4月号）の発行，「天気」の1982年1月より毎号レビューを載せるという計画も無事終了しました．この際，「気象集誌」，「天気」編集部の委員の方々，更に貴重な論文，レビューを寄稿された会員の方々に厚くお礼申しあげます．

また記念事業の一環として昨年10月18～22日の5日間，筑波学園都市にて日本気象学会主催，WMO，気象庁，アメリカ気象学会後援で〝熱帯気象に関する地域科学会議〟を開催しました．外国からの参加者約60名（アジアの諸国から18名），国内の参加者約50名という盛大な会で，発表論文も国際的水準からみて大変すぐれたものでした．この会の運営には気象研究所の人々の献身的なご協力を頂きました．厚く感謝する次第です．

前年の巻頭言の中で東南アジア，オーストラリヤなどの研究者ともう少し研究協力を活発にしたいという希望をのべておきましたが，この点昨年10月の〝熱帯気象に関する地域科学会議〟で，わが国の研究者がアジアの研究者も含めて外国の研究者と一対一の形で，熱帯気象の研究成果を討論できたことは大変有意義だったと思います．高層観測のなかったひと昔前のわが国の気象学研究は，総観気象学の立場にたった「台風の研究」に象徴されていたように思います．しかし今回の会議に出席してみて，わが国の熱帯気象の研究はFGGE，静止気象衛星などの最近の新しい観測資料，数値シミュレーションなどの研究手法をもとにして，また力強く再出発しはじめたという印象を強く受けました．

1970年代は環境問題に関連して大気境界層の研究分野で活発な討議が行われましたが，1980年代には気象学の他のいろいろな分野でも多くの研究成果がみられるよう切望する次第です．